

Title	海外企業でのインターンシップで学生を実務訓練
Author(s)	桑原, 裕
Citation	年次学術大会講演要旨集, 29: 464-469
Issue Date	2014-10-18
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12488
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

海外企業でのインターンシップで学生を実務訓練

桑原 裕 ((株)GVIN・CEO兼ams代表取締役)

はじめに

筆者は常々日本の若者が、若い間に海外での生活を経験し、異文化と接触する必要があると感じていた。それで、著書「異文化と出会おう—オンとオフで暗黙知ネットワークを広げる」(2012年3月刊行:丸善プラネット)の中にそのことを記した。そして、この著書を筆者が代表取締役をしているams社(本社はオーストリアのグラーツ。アナログのASICを開発・生産している)の幹部に、要所を英訳して謹呈した。2012年の秋であった。すると、ams社の幹部から、すぐ強い賛同の反応が来た。即ち、2013年に、日本の若者(具体的には大学生)を数名ams社が受け入れるというのである。予算措置もしたという。

ams社について

実は、ams社には、それなりの理由があった。この会社は、創業は1982年で、ベンチャーとして生まれたが、1992年にスイスの証券市場で上場し、今は従業員1,600人を要する堂々たるアナログICの世界の雄となっている。売り上げの20%を研究開発に投資している。したがって、物凄くイノベーション(新製品を含む)が起きている。既に、メルセデス・ベンツ、BMW、シーメンス、フィリップス等々の堂々たる顧客層を持っているが、まだ、日本の市場には、十分入っていない。即ち、amsの製品は、自動車用センサー類とか、医療用センサー類、産業機器向けセンサー類、i-PADなどのモバイル機器向けセンサー等であるが、日本の大手自動車会社や医療機器メーカーは、名の通った部品メーカーからしか品物を調達しない。したがって、amsは、もっと日本と緊密に連携したいという基本的な姿勢があった。それと、もう一つ、amsは非常にグローバルな会社で、従業員も、オーストリア人だけでなく、非常に多くのアメリカ人、英国人、ドイツ人、北欧の人達、日本人、中国人、韓国人、シンガポール人などのアジアの人など、世界中の人達で構成されている。ただ、会社の本社はオーストリアのグラーツの郊外にあり、オーストリアの文化圏である。本社には約700人が働いているが、残りの900人は、世界中にあるデザインセンターや、営業オフィスで働いている。本社はグラーツの古城を買い取ってこれに近代的な建屋(ファブも)を連結し、瀟洒なたたずまいである。また、グラーツは、オーストリア第二の町であるが、アルプスの東の終焉の地で、美しいアルプスの清流が勢いよく流れ、ハプスブルグ時代の、黄土色の落ち着いた建物が美しい景観を作っている。町全体が世界遺産である。かつて、グラーツ工科大学では、ケプラー、ボルツマン、シュレディンガーなどの近代天文学、物理学の先駆者達が教鞭をとっていた。有名な経済学者のシュンペーターも、ここで教えていた。

オーストリアは今でこそ小さな国であるが、かつて、ハプスブルグ家が栄えた時代には、欧州一の大国であった。その時代からの、グローバルな考え方が、根強く残っているような気がする。

2013 年インターンシップ

さて、筆者は、ams の強い要請を受けて、日本の大学に当り、海外の企業に学生を送ってくれるよう交渉をすることになった。折しも（2012 年 11 月）、東京大学が「特別休学制度」を設置して、学生を海外に派遣するという新聞記事を見たのである。東大は、学生が外国に行かなくなってきたことに危機感を抱き、この制度を作ったのである。（2012 年日経記事）

そこで、東大と話し合った。

話はとんとん拍子に進んだ。実は、ams 社は、欧州の複数の大学とインターンシップを既に実施しており、これらの学生に対する、テーマ、給与、宿舍等々について、十分な経験を有していた。また、筆者も、昔日立で「H I V I P S＝外国人研究者招聘制度」を創設し、これを長く運営してきた経験があった。インターンシップと H I V I P S 制度は非常に似ているのである。

さて、2013 年の東大・ams インターンシップは、

短期インターンシップ：1－2 ヶ月程度 1 人

長期インターンシップ：6 ヶ月－1 年 2 人

と決めた。最初は小規模からスタートし、成功事例を積み上げていくという狙いである。

東大と amss で、このサポート体制をそれぞれ作り、お互いに緊密な連携とり、4－7 月の間に、募集、書類選考、面接を行った。そして、8 月から、これらの学生をオーストリアのグラーツに派遣した。

インターンシップの経験

オーストリアのグラーツに着いた東大生たちは、一様にその異文化環境に目を丸くしたようである。短期インターンシップを経験した内田直樹君の経験談によれば、グラーツの宿舍で、欧州の外国人同僚と生活し、大変仲良くなったようである。短期間ではあったが、週末、ウィーンやザルツブルクなどのオーストリア内は勿論のこと、ユーゴやイタリアやその他の国々にも行ったようである。英語もめきめき上達したらしい。食事は、外食もしたが、自分たちで作ることも多かったようである。自分の考えをしっかりと言わないと、同僚のペースで何でも進められてしまうので、次第に、自分の考えを早めに相手に伝え、対等に話し合うようになったということである。

以下の写真は、内田君が、ams の指導者と気圧センサーの開発をしている写真である。2013 年には、長期滞在者の一人、志水 彰太君もグラーツで一年強仕事をしている。彼は、半年間は、グラーツ工科大学のインターンシップと兼務であった。2013 年 4 月からは、ams

に専心してインターンシップを開始した。それまでは、パートタイムで ams に来て、ams の日本語 Web サイトの整備などのタスクを行っていた。彼も宿舎は、グラーツ市内で、欧州の外国人と同室になり、内田君と同様の異文化経験を享受している。

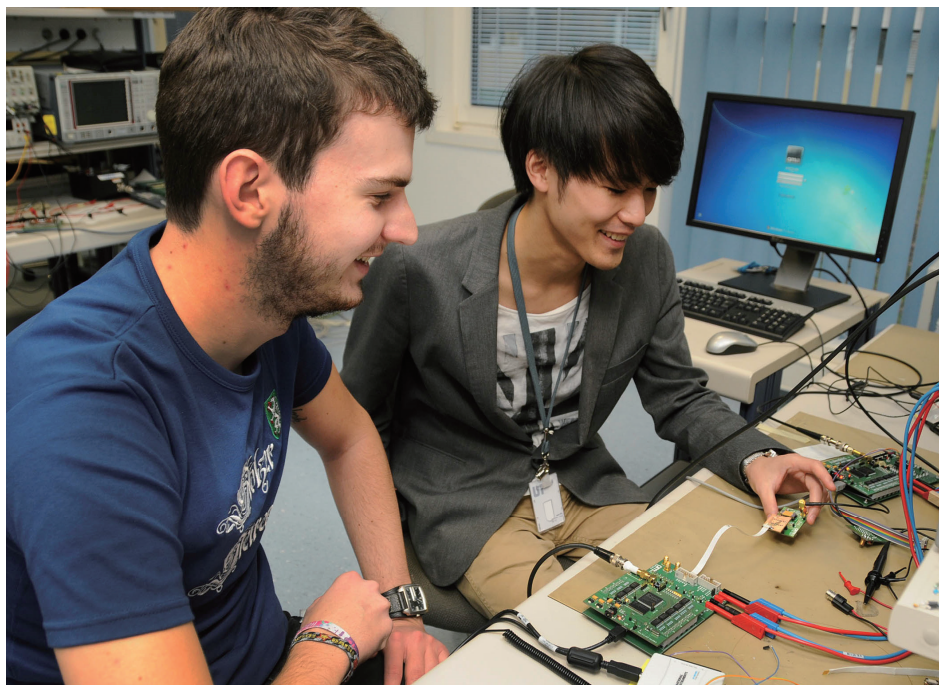


写真 1：指導者とセンサーの開発を行っている内田直樹君



写真 2 : ams で日本語の web サイト構築を意欲的に進める清水彰大君

なお、清水君は、2014 年 10 月までグラーツの ams 本社に滞在し、10 月 7 日に ams 本社で開催される、国際シンポジュームのオーストリア側の事務方役を引き受けてくれた。実は、この国際シンポジューム(第 3 回 Dialogue for Global Innovation for Urban Mobility, Smart Energy and Healthcare)で、筆者は、”Deepening Relationship between Austria and Japan: ams Internship program with Japanese 東大と Universities, Todai and Shuto University”と題して、本インターンシップについて講演する予定である。なお、筆者はこのシンポジュームの全体チェアマンである。

更に、2013 年には、もう一人の長期滞在者・本田祐輔君がいる。本田君は約 10 か月 ams に滞在し、2014 年 6 月に帰国した。2014 年の長期滞在の問題について、東大と ams が打ち合わせを持った時は、彼も参加し、東大のこの面での Web の改善や、長期インターンシップの案内を早めに、ams と一緒に行うことなどを積極的に提案した。

2014 年インターンシップ

2013 年のインターンシップの経験を踏まえて、2014 年インターンシップが開始された。2013 年の反省点は下記の通りである。

- (1) 短期インターンシップでも、1 ヶ月はあまりに短い。ams としては 3 ヶ月滞在してほしい。
 - (2) ams での仕事を見つける手続きを早める。本人に真に合った仕事を見つけるには、時間がかかる。
 - (3) 長期のインターンシップは、大学院生、学部でも 3 年生以上であってほしい。
- これらの点を東大と打ち合わせ、100%合意とはいかないまでも、できるだけ双方が協力して頑張ることにした。

東大-ams インターンシップは、2013 年に一つの成功体験をしたが、これを同年 12 月 12 日に日経新聞(朝刊)が掲載した。(下記)

学生に海外就業体験

コミュニケーションやスキル磨く

オーストリアの古都グラーツ郊外の古城に本社を構えるams。スマートフォン向けなどのアナログ半導体で世界の先端を走るこの企業に、東京大学から2人の学生が1年間のインターンシップに訪れている。東大の卒業生でams日本法人の桑原裕代表取締役が仲介、今年から始まった制度だ。

●装置開発や市場調査

工学部4年生の内田直樹さんは正社員に交じって気圧センサーの開発に取り組んでいる。企業が寮を紹介、社員に準ずる給与も支払う。生活には困らない。

一足先に短めのインターンシップを終えて帰国した工学部3年生の本田祐輔さんは医療用センサーの新市場調査を任された。自分で調査や問い合わせの方法を考え、上司には1週間ごとに1時間程度の報告をする。「難しい半面、面白かった」と振り返る。

研究室などが独自の人脈を頼って学生を派遣する例はこれまでもあつ

東大 欧州で1年



東大生はオーストリア企業で社員とともに気圧センサーの開発に取り組む

首都大 アジア重点

た。大学が直接、海外企業と連携して学生を長期間送り出すのは珍しい。しかも受け入れ先が日本企業、現地企業というのも異例だ。

東京大学は全ての学生に国際体験をさせる目標を掲げて様々なプログラムを推進中。「学生のリポートを見るといい経験をしている。半年、1年の長期で体験できる機会はあるが」と国際化を担当する江川雅子理事も話す。

学生を受け入れたamsのバックスラー・マルコビッチ最高財務責任者も「分り合って仕事するには、1〜2カ月では短い」と長期インターンシップの良さを説明する。アナログ半導体の最先端技術に触れる機会も、若い技術者を育てるうえでも期待は大きい。

受け入れ先を広げる動きも始まった。藤森義明LIXILグループ社長を代表発起人に設立された「東大生海外体験プロジェクト」は資金支援のための募金とともに、インターンシップを受け入

れてくれる企業を探すアングレイトも始めた。卒業生の人脈を通じた受け入れ先の開拓に乗り出している。

首都大学東京はアジアがターゲットだ。2014年春からマレーシアのマラヤ大学での英語研修後にエフソンの現地法人、エフソンプレシジョンマレーシアでインターンシップを始める。初回は6週間の短期だが「できるだけ早く半年程度の長期にしたい」と岡村郁子特任助教は話す。

仲

これを読んだ首都大学が、ぜひamsのインターンシップに参加したいと申し出てきた。このことを東大に図り、amsにも連絡したところ、双方とも、首都大学の参加を即welcomeしたいとの意見であった。首都大学は、2014年2名の長期インターンシップを希望したが、最初ということで、1名とした。

ところが、異変が起きたのである。肝心の東大インターンシップの長期滞在者の応募がないのである。これには、amsも大変驚いた。しかし、理由はわかった。結局東大生に、東大ams長期インターンシップが十分知られていなかったのである。短期は、既にインターンシップ経験者が日本に帰ってきて、いろいろ彼らの楽しい経験を語ってきているので、多くの東大生にこれが伝わっていた。しかし、長期の方は、まだそれがない。これに加えて、長期インターンシップについては、東大側のWebサイトもやや目立たない感じで、多くの学生が気が付かず、これを見逃していた。2013は初年度ということで、東大の中で、学生がこの関係の記事を懸命に探したのであろう。

そこで、ams幹部と東大との間で、そのようなインターンシップの諸問題に関する意見交

換の場を設けて、これを今後定期的に行うようにした。

2014 年インターンシップおよび今後

結局、2014 年度インターンシップは、下記の通りとなった。

短期東大生 2 人

長期首都大学生 1 名

本来は、東大の長期インターンシップ学生は、4 人採用するはずであったが、一呼吸置いたことになった。

一方、ams は、2014 年度に日本にデザインセンターを設立することを決定した。今そのためのリクルートを本格的に進めている。詳細は省略するが、実は、このデザインセンター設立も本インターンシップが大きな原動力になっている。

将来は、インターンシップ体験者が、このデザインセンターで働くという構図も成り立つように思う。

インターンシップは、曲がりなりにも、軌道に乗ってきた。これは、長期的なグローバル社会への貢献である。また、広い意味で、会社の世界戦略に寄与するものでもある。

参考文献

- (1) 桑原 裕「異文化と出会おうーオンとオフで暗黙知ネットワークを広げる」2012 年 3 月 丸善プラネット)
- (2) Yutaka Kuwahara, “Deepening Relationship between Austria and Japan: ams Internship program with Japanese Universities, Todai and Shuto University” Symposium on Urban Mobility, Smart Energy and Healthcare at ams near Graz on 7th October 2014